

楽々建築・楽々都市@仙台 Architecture and Children 子どもたちに建築を通して伝えてきた30年の歩みとこれから

1980年代後半から日本での子どもたち向けの建築教育が始まって30年余りが経過する。ここ仙台でも1981年に全国にも先駆け、創作活動ができる宮城県美術館が誕生し、子ども向けのArt directorである関口怜子氏（ハート&アート空間 ビーアイ代表）によって美術館や広瀬川河川敷を使った空間活動が先駆的な活動事例として捉えられる。アメリカのLearning by designの指定を受けたArchitecture and Childrenが日本でも紹介され、細田洋子氏が宮城県建築士会女性部会のメンバーと教員、学生とともに立ち上げた建築と子供たちネットワーク仙台が誕生した。1990年代に入って稲葉武司教授、小澤紀美子教授等の協力を得て国際交流事業としてAnne Taylor教授、Doreen Nelson教授など関係各位をお招きし、また米国で開催されるセミナー等に参加しながら知見を深めてきた経緯がある。学校教育での研究授業、親と子の建築講座などに積極的にArchitecture and ChildrenやCity Building Education、Center for Understanding the Built Environmentのプログラムを採り入れた。国内では茶谷正洋教授の折り紙建築、延藤安弘教授の幻燈会、斎藤公男教授、山田大彦教授の構造デザインなどユニークな発想を行なっている先生からの協力を得ながら研修会、セミナー、科学館での展示にも繋がった。1996年には総合的な学習の時間の先駆けとして未来のまちづくり学習がDoreen Nelson教授らを招いて小学校で行われたのを契機に1997年にはフィンランドの子どもたちを招いての国際交流学習、その後、テレビ会議システムを用いた米国やフィンランドとの国際交流授業など仙台市内及び宮城県内の小学校を中心に新たな取り組みに発展した。さらに2000年に入ってから奥州街道町探検プログラム、長町副都心プロジェクト、地下鉄東西線プロジェクトなど地域の課題を採り入れた学習に独自性を発揮できるまでになった。2006年以降は学校教育の現場での活動をセーブするようになったが、2011年の東日本大震災を契機に仙台市で唯一残っていた登り窯や一番古い蔵が被災し、子どもたちと協力しながら復興する道を選んだ。その後、南材木小学校での家紋デザインワークショップ、吉成小学校での復興をテーマにした学習、上杉小学校での公園ワークショップ、六郷小学校や立町小学校での国際交流ワークショップに繋がっている。もう一方で、日本ユニセフ協会と竹中工務店、山形大学で始めた「子どもと築く復興まちづくり」プロジェクトでは冒険遊び場、こどものまち、仙台方式で行なってきたまちづくり学習を組み合わせ、復興支援に乗り出し、岩手県大槌町での「未来の教室を考える」、宮城県石巻市での「未来の公園を描こう」、仙台市での「未来の七郷まちづくり」などを行なっている。

今回は一連の建築を題材にした学習方法の組み立て、学校との連携をテーマに仙台での取り組みをベースに振り返りながら、新たなチャレンジの方向性を探る。

<主 催>日本建築学会子ども教育支援建築会議

<協 力>せんだい3.11メモリアル交流館

<日 時>2018年9月6日(木) 14:00~16:00

<会 場>せんだい3.11メモリアル交流館(仙台市若林区荒井字沓形85-47 地下鉄東西線荒井駅舎内)

<参加費>無料

<定 員>40名(当日先着順)

<企画・講師・発表者>

佐藤慎也(山形大学)

細田洋子(建築と子供たちネットワーク仙台)

菅原弘一(仙台市立六郷小校)

実践地である学校の先生方や参加した子どもたち(予定)

<問合せ>日本建築学会子ども教育支援建築会議事務局 三島隆 03-3456-2019 mishima@aij.or.jp